Hirosaki University Hospital Bulletin　2004年（平成16年）9月30日

弘前大学医学部附属病院広報誌

発行：弘大病院広報委員会
（委員長：水沼英樹病院長補佐）

〒036-8563　弘前市本町53
TEL：0172-33-5111（代表）FAX：0172-39-5189
http：//www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/

南塘（なんとう）だより

第35号
（創刊：1994年12月15日）

※南塘とは，弘前市史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

病院長からの一言「ISO9001認証取得に向けて」

弘前大学医学部
附属病院長　棟方　昭博

従前は大学病院の医療は，質の高い安全な医療を行っていると社会から信じられていたが，近年大学病院での医療事故の発生等がマスコミで大きく報じられ，社会から大学病院の医療の質が問われ，第三者機関による評価の必要性が言われている。

医療に関する第三者による評価としては，現在日本ではISO(国際標準化機構)と(財)日本医療機能評価機構がある。本院では，鈴木前病院長からの中期目標の一つとして挙げられている，ISO9001の取得を目指す。ISO9001による認証取得は，外的には社会からの信頼性の向上に繋がり、また内的には医療の質の向上，インフォームドコンセントの徹底や医療過誤の防止に結びつく。本院では薬剤部がすでにISO9001を取得しているが，病院全体としての取得を目的に，7月6，7，12日の３回にわたってキックオフ説明会を開催し，全職員にその意義を説明した。今後は各部門での仕組みの構築や品質マネージメントシステムの運用，内部監査などを行い，本年度中に本審査に向けた準備を終えたいと思っている。ISO9001が要求する管理体制は，①インフォームドコンセントを徹底する，②インシデントの再発防止を強化する，③組織として決めたことを徹底する，④全職員の参加により，医療目標を徹底する，⑤顧客満足情報を医療サービスの自己評価に活用する，⑥医療記録を保護し，保存する，⑦教育訓練を実施したら，その効果を確認する，⑧医療過誤防止のため，判別管理を徹底する，⑨受診者の所有物に注意を払い，管理を徹底する，⑩検査機器の精度を保証する，⑪文書の配布を管理する，⑫マネジメントレビューにより管理体制を見直すなどである。日本医療機能評価機構と異なり，定期的に「マネジメントレビュー」を繰り返すことにより病院全体の Total Quality Control(TQC)が向上し，結果として受診者が質の高い安全な診療を受けられ，かつQOLの向上により高い満足度が得られることを期待したい。

診療科の紹介【耳鼻咽喉科】

耳鼻咽喉科は人間の五感のうち，聴覚，嗅覚，味覚の三感覚を主に扱っています。これらの感覚の異常は生命に直接関わらないことも多いのですが，患者さんのQOLは大きく関わってきます。

また，当科では甲状腺疾患を除いた頭頸部疾患も専門としており，青森県内や秋田県北より悪性腫瘍を筆頭に様々な病気の方が受診されます。

外来は月・水・金曜日の一般外来（新患・再来）と火・木曜日の専門外来（予約制です）に分かれています。一般外来は日によって３～５人の医師と看護師３人，検査技師２人で行っていますが，待合いには常に患者さんがあふれている状態で，待ち時間が長くなることもありご迷惑をお掛けしています。専門外来としては，主に悪性腫瘍患者を診察する頭頸部外来，中耳外来，難聴外来，補聴器外来，めまい外来，アレルギー外来を開設しており，教室員総出で診療にあたっています。

その他に月・金曜日の午後には内視鏡外来を行っており，鼻内視鏡手術後の患者さんを主に治療しています。また火曜日には非常勤の言語療法士が人工内耳手術後の患者のリハビリテーションを行っています。

病棟は２病棟４階で麻酔科との混合病棟です。入院診療では病棟医師が３グループに分かれて患者さんを受け持つ，グループ主治医制を取っています。手術日は月・水・金曜日で，顕微鏡を用いた耳の微細な手術から，他科と協力しながら行う悪性腫瘍摘出・再建術など多岐にわたる手術を行っています。看護スタッフは２チームに分かれて耳鼻咽喉科専門看護にあたっています。

最近は高度難聴患者に対する人工内耳手術も件数が増加し，今後は言語獲得以前の子供たちにも行って行く予定です。また全国に先駆けて行っているレーザーを用いた耳疾患の診断，治療も更に重要性が増し，件数が増加すると考えられます。

（耳鼻咽喉科）

新任科長の自己紹介

泌尿器科長
大山　　力

この度，弘前大学医学部附属病院泌尿器科を担当させて頂くことになりました大山　力と申します。私は昭和59年に本学を卒業後，18年間東北大学および関連病院で泌尿器科の診療に従事し、平成14年3月に秋田大学に移りました。私は泌尿器科全般にわたる疾患を診療いたしますが，なかでも東北大学在職中は尿路悪性腫瘍の診療を専門とし，秋田大学ではそれに加えて，腹腔鏡手術と腎移植の経験を積みました。弘大泌尿器科においても，これまでの診療経験を生かした質の高い医療を提供して参ります。

現在わが国では他国に例を見ない速度で高齢化が進んでおります。一昔まで「高齢者における手術療法の検討」と言えば，65歳が区切りでした。しかし，現在65歳の方の平均余命は男性18年，女性23年です。実際に手術をお受けになる患者さんの年齢も徐々に上昇しています。ご高齢の患者さん，合併症を抱えた患者さんにはより低侵襲な手術や治療法が必要です。副腎腫瘍や腎癌に対する鏡視下手術は標準的治療法としての地位を確立しつつあり，有能な術者の育成は急務であります。また，QOLの妨げとなる尿失禁などの排尿障害も泌尿器科医が取り組むべき重要な問題です。

さて，わが国の死亡原因としては悪性腫瘍が30%を占め，その割合は年々増加しています。泌尿器科領域では前立腺癌が急増していますが，個々の患者さんのご希望，病期，癌の悪性度を考慮して慎重に治療法を選択する必要があります。早期前立腺癌の治療にはさまざまなオプションが存在しますが，手術療法では安全で確実な前立腺全摘術を提供してまいります。放射線療法では最近注目を集めているBrachytherapy（小線源療法）を早急に導入することによって，県内のみならず遠来の患者さんも来院されるようになることが予想されます。

以上のような抱負を述べさて頂きましたが，不足する泌尿器科医の育成から始めて，上述の医療を実践するための診療体制を整備していくには多少時間を要すると思われます。着実に一歩ずつ前進する所存でございます。ご指導，ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

病院広報委員会委員長推薦の一服の絵（１）

「花と少女」

生平　絵美
（平成12年度弘前大学教育学部卒業生）

医学部附属病院には，患者様や教職員の目を楽しませるために様々な絵画が飾られております。今回は，中央診療棟１階，放射線部受付脇の壁面に飾られてある絵を紹介します。
花瓶に生けられた花を見つめる少女の穏やかな表情が，見る者の心を癒してくれます。

先憂後楽

アテネオリンピックを観ながら

副病院長
（第二外科）
佐々木　睦男

８月14日から始まったアテネオリンピックでは，日本人選手のメダルラッシュが続きました。オリンピックでの日本人選手の活躍がしばらく低迷していたので，アテネの興奮と感動は東京オリンピック以来の気がします。オリンピックに限らず，人間が能力の限界に挑戦する姿は，結果の如何にかかわらず，見る人に大きな感動を与えます。今回は多くの競技で，また，金銀銅を問わず，しばらく忘れていた感動を日本人に与えてくれました。特に，体操男子では，個人種目ではそこそこの成績であったが，団体戦で，しかも最終の鉄棒で逆転優勝，というのが圧巻であった。このメダルラッシュの原点は，スポーツ界の機構改革と，競技者ならびにそれを陰からサポートした人々が同じ目的意識を持ちながら精進した結果で，その快挙は自信喪失気味の日本人に勇気とやる気を与えてくれました。

現在，日本の社会では「改革，改革」と，「改革主義（？）」が叫ばれています。従前の社会構造の欠陥を是正し，活力再生のために改革自体は大いに意味のあることです。大学では法人化後５か月を経過し，附属病院でも「中期計画・中期目標」の実現が進行中であります。この中で，「附属病院の経営改善」が重点項目の一つとなっていますが，まさに「言うは易く行うは難し」が実感であります。この目的達成のためには、改革の必要性を教職員各自が共有することが最も大事で，問題点の認識に温度差があっては改革の勢いが半減します。加えて，改革には程度の差こそあれ「痛み」が伴うことも必須であります。「生き残り」をかけ声だけでなく，実際に達成するためにはこの「痛み」を教職員全てが共有することに尽きると思っています。結論を申せば，教職員全員が「高い目的意識」を持った時，改革の道は半分達成されたも同然であります。

今回のアテネでの日本の活躍に対し外国のメデイアが，「日本のメダルラッシュは臥薪嘗胆の成果」と報道しました。まさに附属病院も，その真っ只中にいるのではないでしょうか。

卒後臨床研修に関する説明会について

（医学部医学科６年次学生）７月12日開催

卒後臨床研修センター長　加藤　博之

平成17年度弘前大学医学部附属病院1年次研修医の募集に向けた医学科６年次学生向けの説明会が7月12日19：15より臨床大講義室にて行なわれた。最初にまず卒後臨床研修センター長より挨拶があったあと，大沢副センター長から本学の卒後臨床研修プログラムについて概説があった。その後本院で既に研修を開始している１年次研修医５名の方から後輩へのアドバイスとして,「自分はなぜ弘大病院を研修先として選んだか」,「弘大病院で研修をする利点とは？」,「研修病院を選定する際の基本的考え方」などについて熱いメッセージが送られた。周知のごとく本年度から卒後臨床研修は必修化され，６年次学生諸氏も様々な情報に基づいて研修先の選定に追われていることと思われるが，間近な先輩研修医から直接語りかけてもらうことにより，心にひびくものがあったであろうことは疑いがない。一方参加した学生側からも，本院の卒後臨床研修について一層の充実を望む意見が寄せられた。当然のことながら本学学生はSGTにおいて本院の卒後研修を目の当たりにしているわけであり，彼らの意見は今後の改善策を考える上で貴重である。５月29日に既に本院を含めた青森県内の臨床研修病院による合同説明会があったためか，今回の説明会への参加者は８名に止まった。本年度は７月31日を皮切りに，８月21日，９月4日，10月２日と計４回の採用時面接を予定しており，最終回10月２日面接についての応募締め切りは９月30日である。１名でも多くの本学の学生諸君が応募されることを期待している。

病院職員を対象にBLS･ACLS講習会を開催中

医療安全推進室では，麻酔科・救急部・弘前市消防隊と協力し，平成１６年３月から毎月，病院全職員を対象に救急救命技術の習得・向上を目的とした講習会を開催しています。

講習会はBLS（Basic Life Support：一次救命処置，人工呼吸・心臓マッサージ等）とACLS（Advanced Cardiovascular Life Support：二次救命処置，気管内挿管・薬剤投与等）の２コースを用意し，医師にはＡＣＬＳコース，それ以外の職員にはＢＬＳコースの受講を義務づけています。８月末現在でACLSコースは57名，BLSコースは258名が既に受講しました。

８月１８日には事務職員を対象にBLS講習会が開かれ，消防隊員による講義の後，人形を使った人工呼吸・心臓マッサージの実習，AED（Automated External Defibrillator：自動体外式除細動器）の使用法等について説明が行われました。参加者は，ほとんどがBLS講習を受けるのは初めてとあって，講義はもとより，人工呼吸の実習等に真剣に取り組み，救急救命の重要性に対する意識を新たにしていました。

（医事課）

事務職員等BLS講習

医師ACLS講習

七月七日の夕べ「七夕」について

総合診療部　堀内　悦子

「七夕」は，別名「星祭」とも呼ばれ五節句の一つです。様々な願い事を書いた短冊を竹や笹に結び，飾られた風景は夏の風物詩となっています。これらを夜空に輝く織女星と牽牛星に供えると願い事が三年の間に必ずかなうと言われています。

本院でも，７月５日から７月９日までの５日間にわたり初めての七夕飾りを外来に展示しました。制作過程と状況を紹介します。「患者様に七夕を楽しんで頂きたい。」と竹の寄贈があり，七夕飾りの制作に取りかかることになりました。看護職員が折り紙で飾りを作り，「織姫」「ひこ星」と書いた短冊と伴に竹に結びつけました。医事課職員の工夫で傘立ての周囲にポスターを貼り，竹を立てかける台としました。笹の葉の緑色を保存するために栄養管理室からは食用酢の差し入れをして頂き，みんなで知恵と技を搾り出した七夕飾りが完成しました。展示場所に色紙の短冊を置き，患者様にも参加して頂くこととしました。

初日は「七夕飾りきれい」という歓声が聞かれました。翌日からは願い事が書かれた短冊が飾られ始め，３日目には準備した短冊では足りず，自前の短冊も飾られるようになりました。「お父さんが早く退院できますように」「プリンセスになりたい」など、七夕飾りは患者様の願いでいっぱいになりました。つかの間の癒しを感じると伴に願いを叶えてあげたいと強く思った七月七日の夕べでした。

院内コンサート開催

～待合ホールに女声コーラスの歌声響く～

患者サービスの一環として実施している院内コンサートが平成１６年９月１７日（金）午後６時４５分から外来待合ホールで開かれました。

今回は「女声コーラス・弘前うらら会」(花田聡子代表）を迎えて合唱を楽しんでいただきました。

合唱団の歴史は古く，本学教育学部附属小学校のＰＴＡコーラスを母体に活動を続け，今年７月，弘前文化センターホールで創立５０周年記念演奏会を開催したとのことです。

また，比較的年齢の高い方々をメンバーとする合唱団でもあり，「誰もが避けて通ることのできない加齢に正面から向き合って好きなコーラスを続けている」と聞きました。

プログラムは「花」「白いブランコ」「オー・シャンゼリゼ」「愛の讃歌」など11曲。指揮葛西幸子氏，伴奏松田節子氏と団員３１人の皆さんによる童謡，フォークソング，更にシャンソンなどの親しみやすい曲中心の構成で好感が持てました。やさしく，時に情熱的なハーモニーが会場一杯に響きわたり，心地よさが広がっていました。

コンサートは約３０分間の文字どおりのミニコンサートでしたが，約９０人の入院患者の皆様方には楽しいひとときを過ごしていただけたのではないかと思います。

合唱団の歌声もさることながら，殺風景な会場に映えた鮮やかなスカイブルーのステージ衣装が強く印象に残りました。

次回の院内コンサートは１０月の開催を予定しています。

（医事課）

弘前ねぷたまつり

津軽地方の伝統行事「弘前ねぷたまつり」が８月１日から７日間行われました。弘前大学のねぷたも全学行事の一環として参加，連続41回目の出陣を果たし，沿道の観客から大きな喝采を受け，今年も地域との交流を深めました。

本学のねぷたは，２日，４日，６日の３日間出陣しましたが，参加初日は，医学部附属病院構内において，小児科に入院中の子供達を先頭に附属病院長，病棟医師・看護師及び事務職員等による「小ねぷた」が運行され，まだ日中の暑さが残るなか，子供達は本学職員手作りの角灯籠を手に持ち，「ヤーヤドー」の掛け声に合わせ，津軽の短い夏の夜のひとときを楽しんでいました。今年の弘前ねぷたまつり期間中は，雨もなく天候に恵まれ，本学のねぷたは，多数の教職員，近隣町会の子供達等の参加を得て，子供も大人も一体となって弘前市内を練り歩き，津軽の夏祭りを盛り上げました。

（総務課）

【編集後記】

皆様に「南塘だより」第３５号をお届けします。そして，お忙しい中寄稿していただいた方々にお礼申し上げます。

ようやく朝晩涼しい風が吹く季節になりましたが，今年は全国的に記録的な猛暑に見舞われました。異常な事が日常的に起こり，異常を異常と感じることが少なくなってきた最近ですが，「各地で史上最高気温を更新」というのはやはり異常度ランキング的にはかなり上位だったのではないかと思います。暑さが苦手な私は，「こんな夏を作り出した我々は，この先どこに向かっていくのだろう」なんてことを考えたりもしながら，なすすべなく冷えたビールをあおったりしておりました。

夏が暑いほど紅葉は美しく，冬は厳しくなるといわれます。ちょっと早いですが，秋には秋のお酒を楽しみ，厳しい寒さは熱燗で迎え撃とうなどと考えております。そのためにも，今から体調を整えておかねば。

皆様も，季節の変わり目に体調など崩されませぬよう，ご自愛下さい。

（病院広報委員　T）